

## 岩本 崇「三角縁神獣鏡の終焉」『考古学研究』第51巻第4号 2005

氏は本論文の前に「仿製」三角縁神獣鏡の生産とその展開（2000/1 提出の修士論文の一部を大幅に改稿）の標題で、『史林』第86巻第5号に発表されている【岩本 2003a】。が、紙幅の関係から十分に論ずることが出来なかったので、本論文で「仿製」第3段階以降の鏡群を三角縁神獣鏡の終焉段階と位置付け前稿の不備を補うとともに、終焉段階の鏡群にみる生産面の実態と、終焉段階にまで保持した三角縁神獣鏡の特質を明らかにしたい。と述べている。そこで本論文に入る前に前論文の要約を記し本論文の理解に供したい。

## 「仿製」三角縁神獣鏡の生産とその展開【岩本 2003a】

## 【論文要旨】

古墳に副葬されている三角縁神獣鏡が、一元的な配布主体とその背景にある政治的活動の存在を想定できる点から、古墳時代社会の成立と古墳時代前期の政治的動向を検討する上で有効な資料であるが、多くの研究が三角縁神獣鏡のなかでも大半を占める舶載鏡とされる一群を対象とし、「仿製」鏡として分離しうる一群を深く検討することは少ない。それは「仿製」三角縁神獣鏡が副葬される古墳時代前期後半以降は、他の仿製鏡などの副葬品も多く、「仿製」三角縁神獣鏡を出土する古墳に限られるという事実もその背景にあらうと理解を示したうえで、「仿製」三角縁神獣鏡の終焉は三角縁神獣鏡という一つの器物の終焉であり、その器物としての意義を考える際に極めて重要な情報となり、古墳時代前期の社会の特質をより具体的に把握することが可能である、と本研究の意味づけをしている。「近藤喬一」「小林行雄」「岸本直文」「森下章司」「新納泉」「福永伸哉」各氏の研究を研究史として述べたうえで、これまでの銅鏡の研究において十分に検討されていない「形態の異同」に着目し、「挽型と強く関連しうる外区・鈕・内区区画・乳という形態的特徴」で分類し、さらに外区の形態を基準に鈕・内区区画・乳といったほかの形態的特徴の対応関係から鏡群を設定し、さらに図像文様で検証するという型式学的分析を行い、「仿製」三角縁神獣鏡全体をA～Jの10鏡群に区分したうえで、神獣像表現のうち特に「描法の異同」を重視し製作の諸系統とその変遷を述べている。資料とされたのは「仿製」三角縁神獣鏡が54種118面と、それらとの関わりが特に深いと考えられる舶載鏡である。（資料図2参照）

系統I（A・B・C・D・E・F群）の原形とよびうる三角縁神獣鏡はすべて舶載三角縁神獣鏡で、獣文帯三神三獣鏡（114・115・116・117鏡）、唐草文帯三神二獣鏡（88・90鏡及び201鏡踏み返し原鏡）【筆者注；90鏡は唐草文帯二神二獣鏡である】、波文帯三神三獣鏡

(131-2・132・133 鏡) をその候補としてあげることができるとしている。

**系統Ⅱ** (G・H 群) の原形は舶載三角縁神獸鏡には見出せず、文様構成などから系統Ⅰに属す何れかの「仿製」三角縁獸文帯三神三獸鏡がその候補である可能性が高いとしている。

**系統Ⅲ** (I・J 群) の原形はその文様構成から「仿製」三角縁獸文帯三神三獸鏡とみてよいが、個体差が著しく原形を特定することは困難であるとしている。

「仿製」三角縁神獸鏡は製作者集団が異なる大きく三つの系統により製作されたと考えるが、これら三者は没交渉ではなく、製作技法の共通性から互いにある程度の関連を有していた可能性が高いとしている。次に系統間の併行関係を内区外周部と文様構成で導いている。「仿製」三角縁神獸鏡は外区を鋸歯文帯—複線波文帯—鋸歯文帯で構成するものがほとんどであり、かつその内側に内区外周文様帯をめぐらすのを基本としていることをその理由としている。こうして第1段階から第4段階までの変遷を下図1のように示し、かつ

「仿製」三角縁神獸鏡同士の共伴例 15 例により検証しその妥当性を述べ、「仿製」三角縁神獸鏡は基本的に製作後きわめてスムーズに配布・副葬されたと記している。

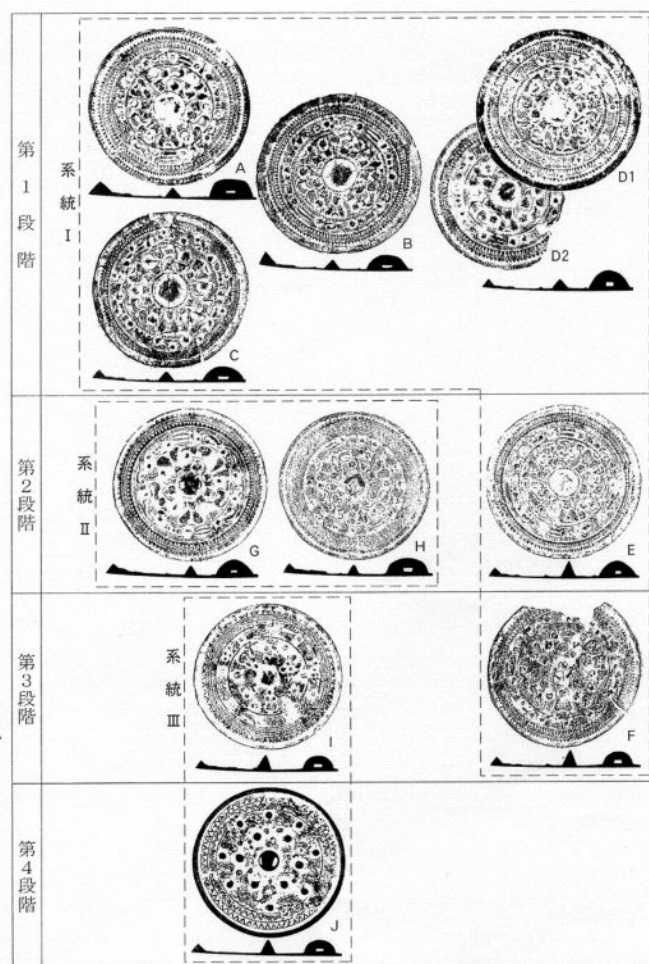


図1 「仿製」三角縁神獸鏡の変遷 岩本 2003a より

第四章 「仿製」三角縁神獸鏡の生産とその展開 において、「仿製」三角縁神獸鏡は舶載三角縁神獸鏡の忠実な模倣にあるとされているが、一方舶載三角縁神獸鏡と「仿製」三角縁神獸鏡が型式学的に連続するという指摘もあり【新納 1991・車崎 1999】、まず舶載三角縁神獸鏡と「仿製」三角縁神獸鏡の関係についての考察の試みをしている。(図2 参照)

第1段階に位置づけられる「仿製」三角縁神獸鏡にはA・B・C・D群がありすべて系統Iに属すとする。系統Iに属す「仿製」三角縁神獸鏡の原形と推測される四鏡種{原形A(117鏡)・原形B(115鏡)・原形C(88鏡)・原形D(131-2鏡)}は、主文様表現を異にする三つの系統に整理でき【岸本 1989】、かつ同一系統内での系列差をも含む。原形と推測される舶載三角縁神獸鏡と「仿製」三角縁神獸鏡の時間的關係は【森下 1998b・c】より、舶載三角縁神獸鏡はすべてもっとも新しい鏡群に含まれると述べ、さらに【岩本 20001a】における検討から舶載三角縁神獸鏡と「仿製」三角縁神獸鏡との時間的關係を連続的にとらえることが可能であり、型式学的な検討の結果とも矛盾せず、従って「仿製」三角縁神獸鏡と舶載三角縁神獸鏡が系統的なつながりを有していたという見方を考慮すれば、両者の關係は同一系統内での型式学的に連続する変化としてとらえることができるとする。第2段階および第3段階で系統Iに属すE・F群は、D群と同様に頭を横に向ける獸像を主文様にもつことから、これらは一連の変化を示す系列的關係にあると判断する。このD・E・F群からなる系列は全体の半数近くと生産量も多く、また長期にわたり製作されたことから、「仿製」三角縁神獸鏡の中心的な系列であったことは間違いないとし、製作当初にあたるD1群では系統を異にする舶載三角縁神獸鏡(原形C)の特徴が目立つが、D2群に至ると二種類あった主文様の神像をそのうちの一種類にし、あわせて内区外周文様帯の唐草文帯を獸文帯に切り替える。D2群は第1段階のそのほかの鏡群よりも相対的に新しく位置づけ出来る可能性が高いことから、系統Iのなかでの系列の統合の結果と想定でき、後に続く鏡群がD2群の系譜をひくE・F群であることもこの想定と合致するとし、D2群の出現をもって「仿製」三角縁神獸鏡の定型化と評価している。以上のような検証から、「仿製」三角縁神獸鏡は舶載三角縁神獸鏡と系統的なつながりを持つとともに、時間的關係から型式学的に連続すると考え、またその定型化は第1段階の内に達成されたと考えられる。製作当初には多数の系列が存在し、しかもそうした多数の系列を一系統的にとらえる事が可能であるという点に大きな特色があり、これらの系列は舶載三角縁神獸鏡の諸要素を複合せながら改変を加えることで生み出されており、「仿製」三角縁神獸鏡と舶載三角縁神獸鏡とのあいだには型式的な差があると考えられることが可能であると結論付けている。続けて「仿製」三角縁神獸鏡の製作動向を考察するにあたり群別にした各鏡群のあり方を形態という観点から整理し、製作動向の復元をしている。第1段階にはA・B・C・D群の四群が存在するがすべて系統Iに属し、いずれの鏡群も形態的なまとまりは強く、規格的な鏡群が併行していたと理解できる。出土面数は第1段階全体で17種・49面と全体の四割強を占め、「仿製」三角縁神獸鏡製作の初期に生産のピークがある。ついで、第2段階にはE・

F・G群の三鏡群が存在し、系統Ⅰに帰しうるのはE群のみで、残るG・H群は系統Ⅱに属すが、系統ⅠのE群は形態のまとまりが強く規格的であり、系統ⅡのG・H群も形態の共通性は高い。生産量は第2段階全体で15種・43面と「仿製」三角縁神獸鏡のなかでは比較的安定した生産が行われていたと見なす。系統ごとの出土面数の内訳は、系統Ⅰが10種・26面、系統Ⅱが5種・17面である。第3段階にはF・I群の二つの鏡群が存在し、それぞれ系統Ⅰと系統Ⅲに帰属する。とも形態的なまとまりが非常に弱い。系統ごとの出土面数は系統Ⅰが5種・5面、系統Ⅲが13種・16面となり、系統Ⅰの生産量は激減し、替わって系統Ⅲが比較的活発な生産を行ったと見る。出土面数は第3段階全体で18種・21面と半減する。三角縁神獸鏡の最大の特徴の一つである同範鏡をもつ例もわずかとなる。ただし、鏡種の総数はほとんど変化がない。第4段階には系統Ⅲに属すJ群のみが存続する。形態的なまとまりが弱く、出土面数はわずかに4種・5面となり、低調な生産状況であったと想定する。さらに「仿製」三角縁神獸鏡の製作のあり方を規格性という観点から追っている。それによると第1段階には細部に至るまで形態的特徴を同じくする極めて規格的な製品が生産され、第2段階でも第1段階での規格性を強く保持する。ところが第3段階に至ると「仿製」三角縁神獸鏡全体が急激に規格性を喪失してゆき、ついには第4段階で終焉を迎えると述べる。この規格性の強弱と生産量の推移から、第1・第2段階では連続的かつ集約的に製作されており、これは需要の高さを反映するものであり、第3段階以降は断続的かつ散発的な製作状況で、これはその需要の低さを反映するものと考え、この第3段階を製作技術の変化とともに大きな画期と考える。これらの変化の背景として鏡の製作管理体制との結びつきの強弱を想定し、「**仿製**」三角縁神獸鏡は**舶載三角縁神獸鏡の製作に携わった製作者ないしは製作者集団を動員し**、生産組織の再編成を行ったうえで厳しい管理のもと規格的に生産され始めたものの、生産の後半期にはそうした体制が大きく変容したと推測できるであろうとする。そしてこの第3段階における大きな変革は三角縁神獸鏡の終焉に向けての動きと無関係ではなく、「仿製」という枠組みをこえた三角縁神獸鏡全体の画期としてとらえる必要があり、第3段階に位置づけられる資料には、前方後円墳から出土することが殆どないという点で、前段階とは大きく様相を異にし、ほかの副葬品などからその副葬時期は帯金をもつ甲冑の出現以降と想定できる。にもかかわらず、古墳時代中期を代表する副葬品である帯金式甲冑と第3段階以降の「仿製」三角縁神獸鏡が共伴した例はこれまで確認されていない。帯金式甲冑を代表とする新たな副葬品体制が確立し、三角縁神獸鏡の威信財としての意義は大きく下降したと想定できるが、それでもなお三角縁神獸鏡がこれまでとは異なる価値体系のなかで一定期間存続していた可能性があるだろうと述べる。

（論者註 ここで述べた三角縁神獸鏡の終焉の様相に関する考察は、論証が不十分な部分が多い。紙幅の都合から詳細については、現在準備中の別稿で論ずる予定である）また、鏡の形態が反映する生産の一側面は、そのほかの鏡と比較することでより一層明確になるはずである。この点についても今後の検討課題にしたい。と結んでいる。

## 【論文構成】

はじめに

第一章 三角縁神獣鏡の終焉段階における鏡群とその実態

終焉段階鏡群の実態

終焉段階鏡群の特質

第二章 三角縁神獣鏡の終焉時期

終焉段階鏡群の年代

終焉直前段階鏡群の年代

終焉段階鏡群の主要な副葬時期

第三章 三角縁神獣鏡終焉の諸様相

出土古墳の分布・墳形・規模

共伴状況にみる特質

第四章 三角縁神獣鏡の終焉とその背景

三角縁神獣鏡副葬の特質と変化

三角縁神獣鏡の副葬にあらわれた葬送の変質

おわりに

## 【論文要旨】

まず、本論文における“終焉”という用語は、三角縁神獣鏡副葬の終了を示すものではなく、三角縁神獣鏡のもっとも新しい段階の製品が古墳に副葬される主要な時期をさす、と最初に定義づけされている。

三角縁神獣鏡の終焉にあたる鏡は、云うまでも無く「仿製」三角縁神獣鏡である。

【岩本 2003a】で「仿製」三角縁神獣鏡を大きく 10 鏡群に分類し、系統関係を考慮して全体を 4 段階に整理した。また、鏡群のなかでの形態のまとまり方が規格の強さの度合いを反映すると考え、規格のあり方の推移から、生産の画期を「仿製」第 3 段階においた。本論では、「仿製」第 3 段階以降の鏡群を「仿製」三角縁神獣鏡の終焉段階と位置づけ、前稿の不備を補うとともに、終焉段階の鏡群にみる生産面の実態と年代、また終焉段階に迄保持した「仿製」三角縁神獣鏡の特質を明らかにすることを目的としている。

三角縁神獣鏡の終焉段階に位置づけられる鏡群は、**F・I・J 群**の三つの鏡群で、出土総数は 24 種 28 面であり、終焉段階直前の E 群と F 群との文様と形態差より、F 群は E 群に比べて規格性を喪失したと論じる。次に、系統Ⅲに属する I 群と J 群について、I 群の中での差異、I 群と J 群の類似性の存在、J 群の中での差異を論じ、終焉段階では類似と

相違が交錯する状況があるが、それらを単純に規格の違いがあるとはいえないとし、特に J 群は出土数も極めて少なくその製作に安定した時間幅を想定することは困難であるとする一方、製作技術面に関しては終焉段階鏡群の鋳造品としての特徴は、それ以前の鏡群に比べ著しく粗悪であるという点に尽き、生産面に関しては 24 種のうち同範鏡をもつのは 2 面の 3 鏡種だけということから、バラエティに富んだ鏡が存在するという終焉段階鏡群の実態を述べる。これらのことから終焉段階の三角縁神獸鏡生産が、ある規格に基づいた鏡を多数製作することよりも、多様な種類の鏡を製作することに重点をおいた可能性を説く。さらに、製作技術の著しい衰退もこうした状況を引き起こした要因の一つ見、新たな文様の採用や文様の新たな使用方法は、生産量の確保を考慮に入れた方策であったと考える。しかし、この終焉段階に至るも製作当初から持っていた特徴、即ち縁部形態と直径 20 cm を越える鏡径の大きさが保持されている点は、三角縁神獸鏡にとって大きさという要素がきわめて重要なものであったとすると同時に、大型鏡としての直径と断面三角形の縁部形態という二つの要素に強い関連性を想定する。

## 第 2 章として、三角縁神獸鏡の終焉時期に関して、終焉段階鏡群の年代を取り上げる。

終焉段階の三角縁神獸鏡が出土した古墳で、その内容が明らかな例は少ないが、I 群と J 群には若干の検討材料があるとして、共伴した副葬品から年代を特定することは難しいが、I 群に属する三角縁神獸鏡が出土した大阪府駒ヶ谷宮山古墳の前部 2 号粘土槨の粘土槨の下部構造は、大阪府和泉黄金塚古墳中央槨や大阪府豊中大塚古墳第 2 主体部西槨、京都府芝ヶ原 11 号墳東槨などの古墳時代中期初頭から前葉【服部 1987、森下 2003、岩本 2003b】の古墳の下部構造に似ており、**おおむね中期初頭ごろに位置づけられる**としている。また内容の豊富な副葬品を出土している山口県松崎古墳からも I 型に属する三角縁神獸鏡が出土しており、その中の鉄製農耕具類の様相が岡山県金蔵山古墳との共通点が多く、さらに双方に共伴する鳥舌鏃が存在することから、松崎古墳を中期初頭ごろに位置づけることができるとしている。福岡県沖ノ島遺跡では J 群の三角縁神獸鏡が 2 面出土している 17 号遺跡を、共伴する蕨手刀子と滑石製玉類から中期初頭ごろに位置づけ、さらに I 群の三角縁神獸鏡が出土した 16 号遺跡は、形成様相は複雑だが中期後葉以降の特徴をもつ遺物のほかには、17 号遺跡とほぼ同様な蕨手刀子や大量な滑石製品など中期初頭ごろの様相をもつ遺物が存在するのみだから、I 群の三角縁神獸鏡 1 面をはじめとする銅鏡についても、中期初頭ごろの遺物のまとまりに伴うものと考えたいとしている。が、これだけでもって終焉段階の鏡群の主たる副葬時期とするには躊躇せざるを得ないうえ、I・J 群と同様に終焉段階に属する F 群については直接的に年代の定点を示すことはできないとして、**終焉段階に先行して作製された E・G・H 群の鏡が出土した古墳の年代を検討**することで、これを検証している。

取り上げた古墳は、おおよそ前期後半でも末に位置づけられる F 群に先行する E 群が出土

した【梅木 1994】京都府百々ヶ池古墳、構造的特徴から中期初頭に位置づけられ、福岡県鋤崎古墳より若干先行する可能性が高いとされるG群とH群が各1面出土した東石室、G群が2面出土した西石室の2基の竪穴系横口式石室をもち、埴輪からも前期後半でも末に近い年代を与えられる佐賀県谷口古墳、終焉直前にあたるG群の鏡が出土した棺の副葬品・円筒埴輪の比較から、中期初頭に位置づけられるうる<sup>ひるい</sup>昼飯大塚古墳より若干先行するという【中井 1996】ことから、前期末ごろの年代が考えうる岐阜県矢道（美濃）長塚古墳。これらの終焉直前段階の三角縁神獸鏡の副葬時期は、前期後半でも近い時期におくことができ、結論として終焉段階の三角縁神獸鏡はおおむね中期初頭頃に主たる副葬時期があったと考えられるとする。

第3章では、三角縁神獸鏡終焉の諸様相を考察するために、三角縁神獸鏡を出土する終焉直前段階の古墳と終焉段階の古墳の分布・墳形・規模や共伴資料の特徴などの比較をおこなっている。（論文中 図6・表2参照）

それによれば古墳の分布は、終焉直前段階では畿内地域とくに淀川を中心にした範囲に集中して分布し、濃尾平野やその周辺、玄界灘沿岸西部にややまとまる傾向があるほかは、点的な分布にとどまり、この状況は「仿製」第1段階の出土古墳においてもほぼ同じであると述べ、一方終焉段階の三角縁神獸鏡の出土古墳は前段階の状況とは異なり、畿内地域の集中的な分布がみとめられないし、むしろ畿内地域の縁辺部に位置する古墳が目立つようになる。つぎに古墳の墳形では、不明なものが多いが終焉直前段階で三角縁神獸鏡を出土した古墳の約三分の二が前方後円墳でそのほかは円墳であるが、終焉段階では約三分の二が円墳であり、古墳の規模もおおむねこうした変化に対応して、終焉直前段階の鏡は規模の大きな古墳からの出土が目立ち、終焉段階ではそれに比べ他の大多数の古墳と同じように規模は小さい。即ち分布が畿内地域の中心部よりも外側に移動する事実と、墳形も前方後円墳主体から円墳主体となり規模も縮小傾向となると分析し、その現象の理由は終焉段階において三角縁神獸鏡の威信財としての意義が相対的に低下したからといえるのではないかとする。つぎに、共伴状況にみる特徴として、終焉段階の三角縁神獸鏡どうしが共伴した確実な事例が沖ノ島遺跡以外には存在しないことと、同様に古墳ではそのほかの鏡と共伴することが少ないことに注目したいとする。沖ノ島遺跡における終焉段階の三角縁神獸鏡の複数面の出土や、多量のほかの鏡との共伴という現象は、より古い段階の三角縁神獸鏡が出土した古墳と共通すると述べる。

さらに注意をひくとして、松崎古墳や沖ノ島16号遺跡、沖ノ島17号遺跡において、中期古墳に特徴的な鳥舌<sup>とりじたやじり</sup>鏃や蕨手刀子が出土しているが、これらの器物の出現は帯金式甲冑の出現と軌を同じくしており【古谷 1998】、両者が古墳において共伴する事例は少なくない。これは終焉段階鏡群の副葬と、帯金式甲冑の副葬には時間的な重複を認められるが、にも関わらず終焉段階に位置づけられる三角縁神獸鏡と帯金式甲冑とが共伴した事例は確認さ

れていない。三角縁神獸鏡と短甲（帯金式に先行する 豎矧板・方形板革綴短甲）とが共伴した最も古い例は、奈良県鴨都波 1 号墳や福岡県若八幡宮古墳（筆者註 共に 3 期）であり、おおむね舶載三角縁神獸鏡のもっとも新しい段階の鏡【小林 1079、福永 1994b、岸本 1995、森下 1998b】と共伴し、相対年代でいえば、古墳時代前期中頃に位置づけられるという。又、後に続く「仿製」第 1 段階の鏡群を出土した、大阪府紫金山古墳や京都府園部垣内古墳、奈良県新沢千塚 500 号墳、千葉県手古塚古墳でも、同形式の甲冑およびその付属具が出土しており、甲冑と三角縁神獸鏡が共伴する状況が認められるが、「仿製」第 2 段階、即ち終焉直前段階にあたる三角縁神獸鏡と甲冑とが共伴した例はまだないといひ、三角縁神獸鏡と甲冑の非共伴傾向が、終焉直前段階に遡る可能性があるといひながら、出土古墳における差が諸現象にもっとも明瞭に現れるのは、あくまで終焉段階の三角縁神獸鏡の副葬時期であるという。この時期の帯金式甲冑出土古墳には、大阪府津堂城山古墳、大阪府交野東車塚古墳、同和泉黄金塚古墳、岡山県金蔵山古墳、三重県石山古墳、鳥取県古郡家 1 号墳などがあり、それらは当該時期の畿内地域やそれぞれの地域を代表する前方後円（方）墳であり、終焉段階の三角縁神獸鏡が出土した古墳とは、墳形・規模が大きく異なると述べ、終焉段階の三角縁神獸鏡と帯金式甲冑とは共伴資料には共通性があるにも関わらず、両者が共伴することはないという。

そもそも古い時期には、三角縁神獸鏡と甲冑との差異は、古墳の副葬品においてはそれほど明瞭ではなかったが、古墳時代中期へと向かう時間の経過のなかで徐々に明らかになりはじめ、**帯金式甲冑の登場に伴い三角縁神獸鏡の威信財としての意義の低下によって一挙に顕在化した**のではないかという。

**第 4 章**では、終焉現象からうかがえる三角縁神獸鏡の特質とその社会的背景について考察する。終焉段階の鏡がとくに沖ノ島遺跡から集中して出土する事実に注目し、沖ノ島祭祀の始まりは、16 号・17 号遺跡の形成開始にあたり、それは終焉段階の三角縁神獸鏡が古墳に副葬される時期とほぼ同じである。この沖ノ島祭祀に関与した王権は、当時の東アジア情勢を考慮すれば、古市・百舌鳥古墳群造営者集団と考えるに充分であり、終焉段階の三角縁神獸鏡が沖ノ島遺跡から集中して出土する事実は、この鏡の流通にも同じ王権がたずさわっていた可能性もあり、また帯金式甲冑の創出と製作に深くかかわったのが、古市・百舌鳥古墳群造営者集団であった可能性もあり、従って三角縁神獸鏡と甲冑の配布主体は異なる存在ではないと考えるといひ田中晋作の主張に異をとる。田中晋作は、帯金式甲冑と舶載三角縁神獸鏡との共伴例に着目し、甲冑を配布された首長に異なる勢力があえて古い三角縁神獸鏡を「供与」したものと見、つまり甲冑と三角縁神獸鏡の配布主体が異なるとしていた（田中 1993）。この時期三角縁神獸鏡の副葬に表象される葬送儀礼が、沖ノ島祭祀と共通する側面をもち、同時に帯金式甲冑に表象される葬送儀礼とは異なる性格をもったものである可能性を考慮できるという。これは終焉段階の三角縁神獸鏡と帯金式甲



冑の非共伴傾向は、葬送におけるこれら二つの器物の威信財としての性格の違いに起因していると考えられるとする。さらに沖ノ島遺跡における終焉段階の三角縁神獣鏡は、威信財としてではなく祭器として存在していたと考えられ、三角縁神獣鏡どうしの共伴例は、より古い時期の三角縁神獣鏡のあり方にも通じ、三角縁神獣鏡の副葬は祭祀という側面が強うかがえ、それゆえに古墳における終焉段階の三角縁神獣鏡の副葬には、そうした側面の希薄化を読み取ることができるだろうという。

次に、三角縁神獣鏡の副葬にあらわれた葬送の変質として、このような三角縁神獣鏡の副葬にみる変化は、古墳が第一義的には葬送の場である点を考慮すれば、この時期における葬送観念の変化を反映したものである可能性が高いとする。前期古墳において副葬鏡は場所や取り扱いを異にして配置されることが多く【森 1978、福永 1995】、三角縁神獣鏡は棺外に配置される例が顕著であるが、中期になるとそうした事例は著しく減少し、武器・武具類が棺内に納められる傾向が強くなるとともに【森下 2003】、鏡の配置場所も基本的に棺内の被葬者頭部付近となる【岩本 2003】が、こうした副葬配置の変化は、前期中葉以降の埋葬施設の簡略化に伴う葬送儀礼の変化に関わっているのはもちろん、器材埴輪の成立に代表される墳頂部での祭祀が発達していくこと【高橋 1988】とも決して無関係ではないと考える。そこに、共同体の祭祀という側面が、被葬者の埋葬という場面から分離してゆく様子を読み取ることも可能と考える。また、仿製鏡がこの時期に総じて小型化する反面、三角縁神獣鏡が終焉までその面径を保持した点は、極めて特徴的であり、面径を保持しつつその威信財としての意義が低下したと想定しうる点は、鏡を代表とした威信財体系そのものの衰退を端的に示すと考えることができるとする。【白石 2003】から古墳時代前期後半から中期初頭においての、一代の首長権が政治的・軍事的首長権と呪術的・宗教的首長権の組み合わせで成り立つ聖俗二重首長性が決して例外的なものではなかったとの説を引き合いにだし、三角縁神獣鏡は共同体のシンボルという聖的側面と威信財という俗的な側面とを併せ持つ器物とし、その終焉段階における威信財としての意義の低下と、副葬にみる祭祀的側面の希薄化という現象が軌を一つとすることから、三角縁神獣鏡は聖俗の一体性がきわめて強い器物であったと評価し、その三角縁神獣鏡副葬にみる変化は、それまでの威信財体系の衰微を示すとともに、本来的に一体性を有する被葬者の葬送と共同体の祭祀との関係性の微妙な変化を反映したものであったと考えることができるだろう、と結ぶ。

そして“おわりに”において、終焉段階の三角縁神獣鏡が一面でも古い時期の古墳から出土した場合には、見方を変更せざるを得ないがとの条件付ではあるが、現状の資料に基づくかぎり、その主要な副葬時期を中期初頭に比定し、「仿製」を含む三角縁神獣鏡の配布がおおむね古墳時代前期を通じてなされた可能性を示し、製作時間幅の「長期編年」説を主張する。

## 【論文評価】

- 論文構成の章立て、各章での検証及び考察を経て結論へと進展させる方法はおおむね良くできていると思う。が、残念ながら終焉段階と位置づけられる資料が少ない上不正確な資料が多く、それゆえに各章における検証・考察には、いささかこじつけが感じられる。しかも 結論が平凡で他の仿製鏡の副葬はそれ以後も続くにも関わらず、なにゆえ三角縁神獣鏡は消滅していくのか、“三角縁神獣鏡の終焉”を述べるには、いささか物足らなさを感じる。
- タイトルについて、“終焉”という用語を“そのもっとも新しい段階の製品が副葬される主要な時期をさす”と定義づけるならば、この論文のタイトルには違和感を覚える。  
例えば“三角縁神獣鏡の終焉時期”とか、“「仿製」三角縁神獣鏡の生産とその展開 その2”とかの方が良いかと思う。
- 舶載三角縁神獣鏡と「仿製」三角縁神獣鏡とは【岩本 2001a】で、すでに時間的關係も連続的にとらえられるし、形式学的な検討の結果とも矛盾しないと述べ、【岩本 2003a】でも「**仿製**」三角縁神獣鏡は舶載三角縁神獣鏡の製作にたずさわった製作者ないしは製作者集団を動員し、生産組織の再編成をおこなった上で生産され始めたものだろうと踏み込んだ見解を示しているからには、「仿製」の言葉を使う意味合いを述べ、(但し【岩本 2003a】の註において特に三角縁神獣鏡についてのみ「仿製」と括弧つきで表すが、「仿製」三角縁神獣鏡が仿製鏡であるという前提そのものが成り立つかどうかについても詳しく検討されているわけではない、と断っているが) 新たな仿製三角縁神獣鏡概念に立脚する論文として述べてもらいたかった。
- 前論文で、「仿製」三角縁神獣鏡の内 54 種 118 面を観察し 10 鏡群に分類したとして、第 1 段階から第 4 段階の変遷を示しているが、その終焉第 3 段階以降の F・I・J 群についての鏡 No. の一覧は示しているが、その他の資料は未発表であり、比較が難しく評価しにくい。紙幅の関係もあろうが載せて欲しかった。
- 最初に終焉段階における鏡群とその実態として、F・I・J 群の鏡群をあげ、表や図でそれぞれの群の鏡の特徴とその前後関係を述べているが、分類そのものに釈然としないものを感じる。論者の表 1 をもとに次頁・表 1 を作成した。確かに 24 種・28 面存在する。が、論文中“生産面に関しては 24 種のうち同範鏡をもつのは 2 面の 3 鏡種だけ”との記述があるが、表 1 の如く 4 鏡種あるので間違っている。

終焉段階の三角縁神獸鏡一覧

■ 同型・古墳時期は前方後円墳集成(近藤)に依る。( )は参考

(鏡群 岩本 2005より) 註;鏡No・径は“大古墳展”図録、王No・径は“王仲殊”著作を基本とし作成

No	鏡群	鏡No	径(cm)	王No	径(cm)	鏡式	出土地・出土古墳名	墳型	古墳時期	所蔵保管
1	F群	218	21,7	116	21,0	獸・三・三	山城・長岡付近古墳	?	?	京都博物館
2		219	22,7	436	22,6	獸・三・三	出土地不明	?	?	明治大学
3		220-1	22,0	228	22,2	獸・三・三	摂津・御神山〔天神〕塚	前・後?	?(大塚~前期)	根津美術館
4		221-2	23,4	83	23,3	獸・三・三	伊勢・錦古墳	?	?(石野4~5)	紀勢町教委
5		222	22,2	354	22,2	獸・三・三	讃岐・石清尾山猫塚古墳	双方中円	2(石野1・大塚5)	東京国立博物館
6	I群	241	21,9	78	21,9	獸・三・三	伊勢・美杉村(伝)	?	?	個人蔵
7		241-2	24,0	526	?	獸・三・三	出土地不明	?	?	大英博物館
8		257	21,8	524	?	獸・三・三	出土地不明	?	?	根津美術館
9		239	21,8	177	21,5	獸・三・三	大和・竜田(伝)	?	?	
10		239	21,8	329	21,8	獸・三・三	安芸・白鳥神社境内古墳	?	3(大塚・石野?)	白鳥神社
11		240	23,4	377	23,4	獸・三・三	筑前・沖ノ島18号	岩上	?4	宗像大社
12		238	21,2	262	22,1	獸・三・三	河内・駒ヶ谷宮山古墳	?	?(大塚3~5)	阪大文学部
13		248	21,1	27	20,9	獸・五・二	駿河・道尾塚古墳	?	3(大塚・石野?)	大中寺
14		242	21,9	81	21,8	獸・三・三	三重・久保古墳	円墳	3(大塚・石野4)	五島美術館
15		243	21,6	447	21,6	獸・三・三	出土地不明	?	?	泉屋博物館
16		246	20,4	399	?	獸・三・三	筑前・二丈町付近(伝)	?	?	名古屋博物館
17		254	20,5	348	20,7	獸・三・三	長門・松崎山古墳	円墳	3(大塚3・石野5)	宇部市立図書館
18		245	20,9	61	22,2	獸・三・三	尾張・小木	?	?	個人蔵
19		250	21,0	26	21,2	唐・三・三	信濃・新井原八号墳	?	?(石野5~6)	個人蔵
20		250	21,0	79	?	唐・三・三	伊勢・美杉村(伝)	?	?	個人蔵
21		249	20,5	371	20,5	獸・三・三	筑前・沖ノ島16号	岩上	?4~5	宗像大社
22		249	20,5	378	20,6	獸・三・三	筑前・沖ノ島18号	岩上	?4	宗像大社
23		252	20,9	82	20,8	獸・三・三	三重・茶臼山古墳	円墳	3(大塚4・石野5)	名大文学部
24	244	21,6	373	21,6	唐・三・三	筑前・沖ノ島17号	岩上	?4	宗像大社	
25	247	21,6	433	21,6	獸・三・三	薩摩・新田神社(伝)	?	?	新田神社	
26	253	20,0	374	20,0	獸・三・二	筑前・沖ノ島遺跡	?	?4~5・5	宗像大社	
27	255	20,5	515	20,5	獸・二・三	出土地不明	?	?	個人蔵(坂本)	
28	255	20,5	529	20,5	獸・二・三	筑前・沖ノ島遺跡(推定)	?	?4~5・5	宗像大社	

表1 終焉段階の鏡群を出土した古墳・遺跡とその時期

鏡を直接観察できない上、古墳築造時期に関してもそれぞれ学者によって、評価が違うから一概に問題ありとは言えないと思うが、前方後円墳集成【註12】に従って考えるとすれば、F群・I群に分類される鏡を副葬する古墳の時期のなかには、矛盾する鏡があると思う。時期不明が多いのでそれらは外すとしても、鏡No、222・239・248・242・254・252の各古墳時期は、編年3期とされている。鏡そのものの各特徴から分類されたとしても、先行する時期に副葬されていたと考えられるものであり、鏡種・面数が少ないだけに問題があると思う。(しかし、当該古墳時期も石野編年によれば説得力はあると思う)しかも、“終焉段階の三角縁神獸鏡が一面でも古い時期の古墳から出土しないかぎり、現状の資料からは、その主要な副葬時期を中期初頭に比定する“とされるが、J群に関してはそう言えそうだが、F群・I群に関しては時期的に不明な点が多い。実態として述べるF群、又I群とJ群の分類の仕方もかなり苦しい説明であると思う。図3のなかにJ群の断面も入れてあれば良かったと思う。同范鏡1組あたりの総面数でJ群を約1,6面と記されているが、4鏡種・5面だから1,25となり間違っている。結局、副葬古墳からの時期の判断はF群については論者も不能とし、I群については2例をあげて検討されているが、どちらにも根拠を求めるには聊か薄弱だと思われるが、長門・松崎古墳の3期という年代感を別にすれば、中期初頭ごろとの判断を肯首すべきか? 確実なのは終焉段階最終の中期初頭から前葉のものと推察されるJ群だけと思う。

●終焉段階の年代を再検証するためにF群に先行するE群、すなわち「仿製」第2段階＝終焉直前段階の検討をされ、終焉直前段階は前期後半でも末(編年4期)とした上で、第3段階を中期初頭(編年4～5期)にすることは、おおむね妥当な評価だと思われる。  
(因みに、論者の中期とは編年4期後半、津堂城山古墳の出現をもってその始まりとされる。)「仿製」第2段階の始まりに関しては記述されていないが、前論文(岩本2003a)より推察すると編年3期から見られる。「仿製」第1段階は本論文中記述されているように編年2期に始まる。【註17】(資料2参照) 従って「仿製」第1段階の副葬時期と「仿製」第2段階の製作開始時期との間は大変短いものと思われる。第2段階のうちG・H群を出土した、肥前・谷口古墳も美濃・長塚古墳も編年第3～4期内にある。(表2参照)

終焉直前段階と終焉段階の三角縁神獸鏡出土古墳

時期	古墳名	墳形	墳長(m)	古墳時期	出土鏡		
					三角縁神獸鏡		
					船載	仿製	
終焉直前段階	播磨・南大塚古墳前方部	前方後円	90	3	—	E1(2)	
	肥前・栲路寺古墳	前方後円	80	3~4	—	E1	
	山城・百々ヶ池古墳	円	50	4	2	D1・E1	
	伯耆・上神大塚古墳	円	25	4~5	—	E1	
	山城・平尾稲荷山古墳	円	33	3	—	E1	
	尾張・出川大塚古墳	円	45	3	—	E2	
	日向・西都原13号墳	前方後円	78	3~4	—	E1	
	尾張・兜山古墳	円	45	2~3	—	E1	
	摂津・麻田御神山古墳	前方後円	80	2~4?	—	E1	
	筑前・一貴山鏡子塚古墳	前方後円	103	4	—	E6・H2	
	近江・天王山古墳	不明	不明	?	—	G1	
	美濃・矢道長塚古墳西棺	前方後円	87	4	—	D1・G1	
	尾張・小木宇都宮古墳	前方後円	59	2~3	—	G1	
	尾張・小木天王山古墳	不明	?	?	—	G1	
	肥前・谷口古墳東石室	前方後円	81	4	—	G1・H1	
	肥前・谷口古墳西石室	前方後円	81	4	—	G2	
	河内・ヌク谷北塚古墳	不明	?	?4	—	H2	
	甲斐・中道鏡子塚古墳	前方後円	169	4	1	H1	
	終焉段階	伊勢・鑪古墳	不明	不明	?4~5	—	F1
		伝讃岐・石清尾山猫塚古墳	双方中円	96	2~5	不明	F1
伝山城・長岡近郊古墳		不明	不明	?	・(1)	F(1)	
河内・駒ヶ谷宮山古墳前方部2号塚		前方後円	65	?3~5	—	I1	
安芸・白鳥神社古墳		不明	不明	3	—	I1	
伝伊勢・草山久保古墳		円	52	3	・(1)	I(1)	
尾張・甲斐敷古墳		円	30~35	2	—	I1	
伝駿河・道尾塚古墳		不明	不明	3	—	I(1)	
信濃・新井原8号墳		不明	不明	?	—	I1	
伊勢・清生茶臼山古墳		円	55	3	—	I1	
長門・松崎古墳		円	28	3	—	I1	

終焉段階における三角縁神獸鏡の分布



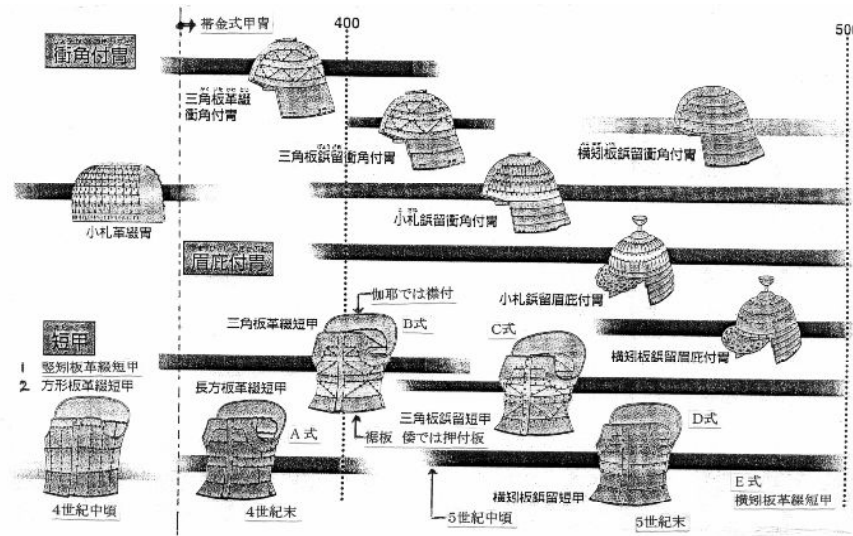
岩本 2005 を改変

表2 終焉直前段階と終焉段階の三角縁神獸鏡出土古墳 図2 終焉段階における三角縁神獸鏡分布  
論文中図6・表2で(資料1参照)、終焉直前段階と終焉段階における三角縁神獸鏡の分布をもとに、「分布が畿内地域の中心部よりも外側に移動する事実と・・・」と述べているが、終焉段階の古墳のほとんどは2・3期のものであり(表2参照)、それらと出土地不明・伝承資料の鏡を除くと存在するのは畿内と沖ノ島遺跡しかない。(図2参照)伊勢は検討を要する。従ってこの現象から言えることは、この時期すでに三角縁神獸鏡は畿内関係者だけのものとなり、しかも出土面数からも祭祀に関係した利用目的が多いと思われる。5期以降の三角縁神獸鏡の副葬状態はまさに畿内が中心であり【註18】(資料6参照)、「仿製」三角縁神獸鏡以外の鏡がほとんどであるから、「伝世」していたものを処分したという感じがする。三角縁神獸鏡の威信財としての意義は4期後半、すなわち前期後半中葉には終わっていたのではないかと推察する。即ち終焉段階直前にあたるだろう。

【考 察】

●“帶金式甲冑”での検討

帶金式とは、文字通り帶金によって筒の枠をつくり、そのあいだを鉄板やまれに鉄地金銅張板でうめる形式の甲冑で、出現するのは豎矧板革綴短甲や方形板革綴短甲に続く、その技法を創案した4世紀末の「長方板革綴短甲」からとされているので(図3・図4参照)、論者のいう「仿製」第2段階＝終焉直前段階は、丁度「帶金式」出現直前にあたると思われる。論文中での表3は帶金式甲冑出現前段階の豎矧板革綴短甲や方形板革綴短甲出土の資料でよく符合している。



・・・終焉直前段階・・・終焉段階・・・終焉時

図3 甲冑の変遷図一1 (河上 邦彦?) ”大古墳展“図録より 一部加筆

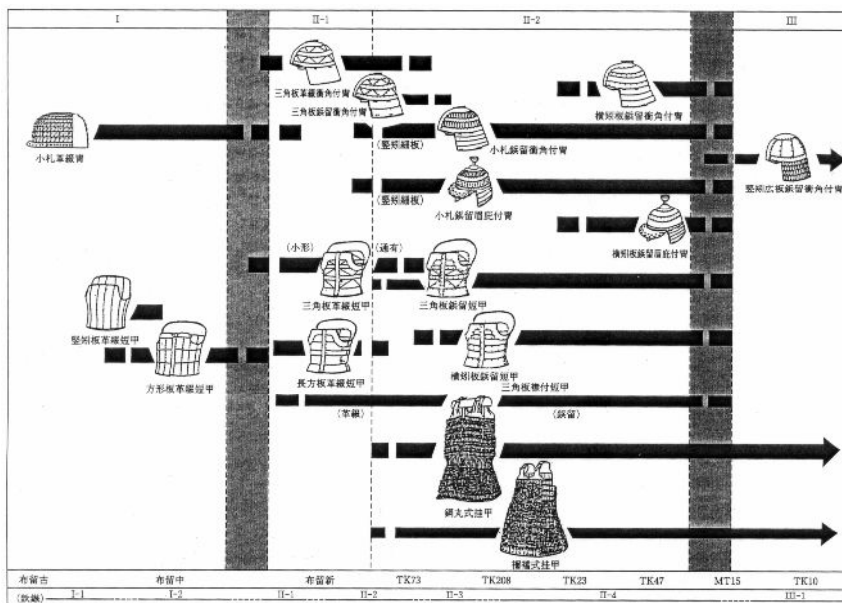


図4 甲冑の変遷図一2 (田中 晋作) 大和の古墳IIより

従って論文中での記述、“三角縁神獸鏡の終焉段階鏡群の副葬と、帯金式甲冑の副葬には時間的な重複をみとめることができる“は同意しうる。共伴するとすれば「仿製」第3段階からである。即ち論者のいうF群・I群を出土した古墳に共伴して出土しているか否かを検証すればよい。F群の5面中検証できるのは、伝讃岐・石清尾山猫塚だけで筒形銅器はあるが甲冑はない。I群は18面中筑前の沖ノ島18号の2面・16号の1面・河内の駒ヶ谷宮山の1面、長門の松崎の1面の計5面であるが、いずれも甲冑はない。従って三角縁神獸鏡の終焉段階鏡群の副葬品に関しては、帯金式だけでなくそれ以前の甲冑そのものが共伴しないといえる。

論者が比較する同時期の大型前方後円(方)墳には短甲あるいは冑が副葬されているが、同時に鏡も副葬されている。**河内・津堂城山古墳**は墳長 208m の前方後円墳、斜縁二神四獣鏡2・変形神獸鏡1・龍虎鏡1・変形龍虎鏡1の計5面の舶載鏡、そのほか4面の不明鏡・巴形銅器4があるが、甲冑は三角板革綴甲冑片2である。**河内・交野東車塚古墳**は墳長 65m 近くの前方後方墳、四獣鏡1・変形四獣鏡1・変形二獣鏡1の計3面の舶載鏡、そのほか巴形銅器1・筒形銅器1があるが、三角板革綴短甲1とその中に入っていた三角板革綴衝角付冑1があった。

**和泉・黄金塚古墳**は墳長 85m の前方後円墳、中央槨からは半円方格四神四獣鏡1・周是作二神二獣鏡1が出土しているが甲冑はない。東槨からは半三角縁波文帯龍虎鏡1・画文帯神獸鏡2・巴形銅器3のほか三角板革綴短甲1・同衝角付冑1・肩鎧一対・頸鎧1・漆塗革製草摺1が出土している。西槨からは半円方格帯神獸鏡1のほか革綴短甲1・三角板革綴衝角付冑1・肩鎧1・頸鎧1が、三つの槨からはそれぞれ多量の武器が出土している。**備前・金蔵山古墳**は墳長 165m の前方後円墳、中央石室から仿製方格規矩鏡1・筒形銅器1のほか短甲片が南石室からは変形四神二獣鏡1とかなりな量の短甲片が出土している。**伊勢・石山古墳**は墳長 120m の前方後円墳、中央槨からは鏡の副葬はなかったが革綴冑1・盾が、東槨から仿製八弧内行花文鏡1・巴形銅器1のほか革綴短甲1・盾が、西槨は仿製神獸鏡1・小形仿製神獸鏡1はあるが武具はない。**伯耆・古群家1号墳**は墳長約 90m の前方後円墳、中央主体部は盗掘をうけていたが、八ツ手葉形銅製品1(これは大和・新沢千塚と同形)が、北側の箱形石槨からは重圈素文鏡1と長方板革綴短甲1ほか鉄製武器が出土している。【註7】 鏡は舶載鏡が殆どである。

確かに帯金式甲冑の副葬であるが、この時期(4～5期)**越前・向出山1号墳**・径約 60m の円墳から四神四獣鏡1・鏡式不明鏡1のほか鉄製眉庇付冑2・鉄製挂甲小礼一括・金銅装頸甲1が多量の鉄製武器とともに出土している。**山城・石不動古墳**・墳長約 75m の前方後円墳、南槨から画文帯神獸鏡1・長方板革綴短甲1が、**筑前・若八幡宮古墳**・墳長約 46m の前方後円墳、三角縁二神二獣鏡1・環頭大刀ほか鉄製武器とともに堅矧板革綴短甲1が、**山城・久津川車塚古墳**・墳長 180m の前方後円墳の主体石槨内から唐草文帯四神四獣鏡1・画文帯神獸鏡1・仿製画文帯神獸鏡1・仿製四獣文鏡1が、北小石室からは小礼鉾留衝角付冑2・三角板革綴短甲5・頸鎧2以上が多量の鉄製武器とともに出土している。このほか**各地古墳**での甲冑副葬をみる。

「仿製」三角縁神獸鏡終焉段階には、それらを副葬する遺跡・古墳には帯金式甲冑だけでなく、それ以前の甲冑さえ副葬されておらず、同時期の他の前方後円墳の副葬品のなかに帯金式甲冑を見出せることは、「仿製」三角縁神獸鏡だけでなく三角縁神獸鏡そのものの動向にも重要な意味があるように思える。何故ならば同時期およびそれ以降も「舶載」鏡にしろ仿製鏡にしろ、鏡の副葬は続くのに繰り返しになるが、前にも述べたように5期以降の三角縁神獸鏡の副葬状況はまさに畿内が中心であり【註18】（資料6参照）、「仿製」三角縁神獸鏡以外の鏡がほとんどであるから、それらは“伝世”していたものを処分したという感じがする。が、論者が指摘するように帯金式甲冑が登場したから三角縁神獸鏡が威信財としての意義が低下したのではなく、それ以前からすでに三角縁神獸鏡の役割の喪失が始まっていたのではないかと考えるが、中期における帯金式甲冑をはじめとする武器類の副葬が主流となる背景には威信財体系の変化があり、単に鏡の流行の変化により廃れたのか？それとも三角縁神獸鏡を取り扱っていた集団と甲冑を取り扱う集団が別なのか？

論者は三角縁神獸鏡と甲冑の配布主体は実態として異なる存在ではないとも考えられると述べている。そして、その主体を古市・百舌鳥古墳群造営者集団としている。が、筆者は三角縁神獸鏡と甲冑の配布主体は変わるが、前方後円墳を造営することに関しては同質体制集団であったと考える。当然後者は古市・百舌鳥古墳群造営者集団であろう。

沖ノ島遺跡で甲冑が祭祀品となるのは岩上祭祀Ⅲ段階（5世紀前半）の21号遺跡の衝角付冑と岩陰祭祀Ⅰ段階の7号遺跡（5世紀後半～6世紀前半）での挂甲である甲冑小札だけである。この時期になると祭祀は、古市・百舌鳥古墳群造営者集団が執り行っていると思われる。鏡は仿製の殊文鏡があり、以後の遺跡に関しても仿製鏡であるが継続して奉納されている。（図3と図4について；小札革綴冑は堅矧板革綴短甲や方形板革綴短甲に先行するようだから【註2】・【註4】・【註5】・【註14】・【註15】、図3の小札革綴冑の位置については正確ではない。）

帯金式甲冑に限らず、三角縁神獸鏡の終焉段階での「仿製」三角縁神獸鏡を入手し副葬（奉納）した主体は、そもそも甲冑を副葬品として尊重する価値観を持っていなかったのか？または甲冑を入手できない立場だったのか？

筆者は沖ノ島遺跡祭祀を最初に行なった集団は、当時甲冑を入手する実力を持っていたと思う。

沖ノ島祭祀の始まりは、Ⅰ号巨岩における岩上祭祀Ⅰ段階の17号、18号遺跡からであると考えられている。そして「仿製」三角縁神獸鏡を奉納した祭祀は、岩上祭祀Ⅱ段階の16号遺跡で終わっている。17号、18号遺跡の年代は4世紀後半（編年4期）で、16号遺跡はそれより多少新しい4世紀後半後葉（編年4～5期）と考えられる。【註6】

当時の東アジアの情勢は中国においては 316 年に西晋が滅び、東晋の時代になり中国国内は荒れ朝貢関係は絶たれていた。313 年楽浪郡の撤退、引き続き帯方郡も命脈を絶った後、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の国家としての急速な進展がみられ、その領域に関する争いは過激になっていく。但し伽耶地域は国家としての形成はなかった。

その中で倭国（主に大和勢力を中心に）も、半島（伽耶・百済を中心に）との関係を強めていく。沖ノ島遺跡形成の時期（370 年～380 年頃と思う）、半島との関係は特に伽耶地域に見られる。金海大成洞古墳群はこの時期との関係を物語る。

巴形銅器・筒形銅器（半島製と思う）・碧玉製品・土師器などの倭系遺物が見られる。

その後高句麗の南下が始まり（427 年）、百済との関係がより緊密になる。

この時期はすでに「仿製」三角縁神獸鏡の最終局面であり、テーマから外れるが古墳時代中期となり、古市・百舌鳥古墳群造営者集団の活躍する時代となる。

「仿製」三角縁神獸鏡の終焉時期は「倭の五王」の活躍する前時代に当たるだろう。

「仿製」三角縁神獸鏡から仿製三角縁神獸鏡になる画期は存在するだろうか？

最後になるが、筆者は基本的にはおおむね本論考に賛同する。

以上

#### 引用・参考文献

- |       |                        |               |                    |      |
|-------|------------------------|---------------|--------------------|------|
| 【註 1】 | 三角縁神獸鏡の終焉              | 岩本 崇          | 考古学研究第 51 巻第 4 号   | 2005 |
| 【註 2】 | 「仿製」三角縁神獸鏡の生産とその展開     | 岩本 崇          | 史林 第 86 巻第 5 号     | 2003 |
| 【註 3】 | 大古墳展図録～ 三角縁神獸鏡目録       | 樋口 康隆他        | 東京新聞               | 2000 |
| 【註 4】 | 大和の古墳 II               | 河上 邦彦 編       | 人文書院               | 2006 |
| 【註 5】 | 日本考古学事典                | 田中 琢・佐原 真     | 三省堂                | 2002 |
| 【註 6】 | 沖ノ島祭祀遺跡                | 佐田 茂          | ニュー・サイエンス          | 1991 |
| 【註 7】 | 日本古墳大事典                | 大塚 初重他        | 東京堂出版              | 1989 |
| 【註 8】 | 古鏡総覧                   | 奈良県立橿原考古学研究所編 | 学生社                | 2006 |
| 【註 9】 | 三角縁神獸鏡の研究              | 福永伸哉          | 大阪大学出版会            | 2005 |
| 【註10】 | 古墳文化論考                 | 小林 行雄         | 平凡社                | 1976 |
| 【註11】 | 三角縁神獸鏡 新鑑              | 樋口 康隆         | 学生社                | 2000 |
| 【註12】 | 前方後円墳集成                | 近藤 義郎他        | 山川出版社              | 1992 |
| 【註13】 | 全国古墳編年集成               | 石野 博信         | 雄山閣出版              | 1995 |
| 【註14】 | 古墳時代の研究 副葬品            | 河上 邦彦(部分)     | 雄山閣出版              | 1995 |
| 【註15】 | 雪野山古墳の研究               | 福永伸哉          | 八日市市教育委員会          | 1996 |
| 【註16】 | 古墳時代甲冑研究の方法と課題         | 古谷 毅          | 『考古学雑誌』第 81 巻第 4 号 | 1996 |
| 【註17】 | 日本出土三角縁神獸鏡の鏡式と副葬時期     |               | 倉本 卿介              | 2000 |
| 【註18】 | 古墳の副葬鏡式と同範関係にある古墳と築造時期 |               | 倉本 卿介              | 2001 |